

京城師範学校「演習科」第1期生について

稲葉， 継雄

九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門国際教育環境学：教授：比較教育学・東アジア近代教育史

<https://doi.org/10.15017/10530>

出版情報：大学院教育学研究紀要．9， pp.39-52， 2007-03-26．九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン：

権利関係：

京城師範学校「演習科」第1期生について

稲葉 継雄

はじめに

拙著『旧韓国～朝鮮の「内地人」教育』を2005年11月に上梓し、同書をまとめるにあたってお世話になった方々、主としてかつての在京城・釜山「内地人」学校の関係者に謹呈したところ、礼状の多くに添えられていたのは、〇〇〇学校の同窓会全国大会は遠からず終止符を打つという趣旨の一文であった。戦後も60年以上の歳月を閲し、会員の高齢化が進んで、もはや同窓会の幹事を務める人がいないというのである。インタビューやアンケートなどによる植民地教育史研究には、残された時間が多くないことを痛感させられたものである。

京城師範学校は、1921年4月に創設された。演習科第1期の入学者最年少が17歳であったから、創立当時を知る生き証人は、もうほとんどいないことになる。したがって本稿は、限られた文献資料に拠らざるをえないが、今後、生の証言等を加味して京城師範学校の全体像を描くに際しての基礎作業としての意味をもつ。

ところで、本稿標題の「演習科」第1期生は便宜的なネーミングである。ここには、正真正銘の京城師範学校演習科（旧京城中学校附属臨時小学校教員養成所）生と、彼らとともに学んだ京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所生が含まれており、両者が京城師範学校演習科第一部・第二部となった1922年入学の第2期生以降からみれば「演習科第1期生」にあたるというわけである。本稿の、引用文を除く叙述では、狭義の演習科と臨時教員養成所を含めた広義の「演習科」を峻別するよう心掛けていきたい。

なお本稿本文では、当時の「内地人」を日本人とする。

一. 京城師範学校の開設経緯

朝鮮総督府は、植民地朝鮮における初等学校（日本人の小学校、朝鮮人の普通学校）の拡充に備えて、高等普通学校附設の師範科・教員速成科などで朝鮮人教員を養成するとともに、日本人教員の朝鮮での養成にも着手した。その第1弾が、1911年4月、朝鮮総督府中学校（後の京城中学校）附属施設として開設された臨時小学校教員養成所である。同養成所は、修業年限1年、定員40名と短期・小規模の教員養成機関であったが、生徒全員の寄宿舎居住、在学中の学資支給、卒業後2年の服務義務など教育体制は日本内地の師範学校と同様であった。

第2弾は、京城高等普通学校附設臨時教員養成所である。そもそもこの養成所は、1911年11月、

「朝鮮教育令」の施行とともに旧韓国の官立漢城師範学校を改編したもので、当初は朝鮮人だけが対象であった。しかし、1913年4月、それまでの普通学校朝鮮人教員養成部門（3年制）を第一部とし、新設の第二部（1年制）において普通学校日本人教員を養成することになった。これについて、当時朝鮮総督府学務課長であった弓削幸太郎は次のように述べている。

普通学校に於ける内地人教師は総て内地より採用し一ヶ月又は三ヶ月間の講習会を開き、朝鮮人教育者たるに必要な事項を教習したけれども不充分であつたから、大正二年三月京城高等普通学校附設臨時教員養成所規定^(マツ)を改正して第二部を設け、中学校卒業生又は之と同等以上の学力を有する内地人を收容し、官費を以て一ヶ年間朝鮮語その他朝鮮人教育に必要な事項を教へ、将来朝鮮人教育の中堅たるものを養成することにした。⁽¹⁾

京城高等普通学校附設臨時教員養成所は、1914年から朝鮮人生徒の募集を中止し、1913年入学の第一部生が卒業した1916年4月以降は日本人生徒（定員80名）のみとなった。彼ら日本人生徒には、京城中学校附属臨時小学校教員養成所生徒の学資金支給や卒業後の服務に関する規程が準用された。

臨時養成所でなく正規の学校としての師範学校を作ろうという話は、1919（大正8）年からあったようである。京城師範学校の創立とともに京城第一高等普通学校（1921年4月18日、第二高等普通学校の発足に伴って京城高等普通学校が校名変更）教諭兼京城師範学校教諭となった向井虎吉が次のように述懐している。

私が朝鮮へ招聘されて行きましたのは大正八年四月でした。其時私は九州大学の解剖学教室の桜井順二郎博士の許で人体解剖の勉強中でした。桜井博士が満洲、朝鮮をご視察なされ、旧知の間柄の総督府の学務局長と相談して私の赴任を決定されたそうです。私は単身で赴任し、現在の科学館の一室で局長に逢えたのです。現在のあの総督府は建築中でした。私が局長に師範学校は何処にあるのですかと尋ねると「ナーニ是から師範学校を造るのサー。まあまあゆっくり朝鮮を視察して朝鮮事情を会得してからの話サー」と至って呑気なお話。それで私は、「朝鮮総督府囑託視学官室勤務高等官五等五級」の辞令を頂戴いたしました。⁽²⁾

ここにあるように、1919年4月の時点ではまだ漠然とした話であったが、1920年12月には、「来年度からは師範学校を特設する筈になつて居」た。弓削幸太郎が1921年1月10日に発表した（したがって原稿は当然1920年中に書かれた）論文「朝鮮に於ける内地人教育に就て」の一節は次のとおりである。

小学校の教員は内地より赴任するものの外、明治四十四年来朝鮮に於ても之が養成に努力して居る。即ち教員養成の爲めには今日まで師範学校を特設するに至らず、京城中学校に臨時教員養成所を附設して中学校卒業者を一年間官費を以て教養するのである。時勢の変化の爲今後此方法のみに

ては必要なる教員を得ることが出来ぬから、来年度からは師範学校を特設する筈になつて居る。⁽³⁾

師範学校の特設は単独で論じられたのではなく、「朝鮮教育令」の全面的改正の一環として位置づけられていた。そして「朝鮮教育令」の改正案自体が、1920年12月上旬にはほぼできていたのである。しかし、「総督は朝鮮教育令大体の立案を了したれども直ちに之を発表することをなさず、大正九年十二月臨時教育調査会なるものを設け之に付議して朝野の意見を聴くことゝした。」⁽⁴⁾このための「臨時教育調査委員会規程」が公布されたのが同年12月23日、同委員会の第1回会議が開催されたのが1921年1月7～10日であった。「四日に亙る審議の結果委員会は大体に於て当局の方針即ち学務当局よりの参考案を承認し」⁽⁵⁾たといわれているが、『京城日報』は、早くも1月8日の社説で、「師範教育に考慮を煩し、既に一師範学校の創設されつゝあるは、朝鮮教育界の爲め祝福に堪へざる処である」と述べている。師範学校の特設が、「臨時教育調査委員会」招集前からの既定路線であったことがわかる。

ちなみに総督府は、師範学校と並んで高等学校の新設も計画していた。しかし、高等学校新設計画は、1921年度予算査定の結果、立ち消えとなった。これまた、師範学校がいかに重要視されたかの傍証となろう。「高等学校見合せ」と題する1921年2月16日付『京城日報』記事は次のとおりである。

総督府にては曩に来年度予算編成に当り教育機関拡張充実を期する為め高等学校、師範学校各一校外新義州元山其他に中学校高等普通学校等を新設するに決し之に要する費用を計上する所あしるが右の内高等学校新設は将来実現せらるべき大学設立の前提をなすものにして差当り来年度に於て京城に一校を置き年度早々開校を予定せると共に高等教育機関新置の見地よりして一般に最も重要な事項として注目せられたるも仄聞する所によれば該高等学校新設費は総督府財政の按配上予算査定に当り予算面より削除せらるゝと共に当分之れが設置を見合せに決したりと云ふ

上の記事から6日を経た2月22日、平壤中学校長赤木萬二郎が師範学校開設準備に関する事務取扱を囑託された。これを受けて3月3～4日、京城師範学校・元山中学校・京城第二高等普通学校などの新校長を集めて「新設官立学校創立事務打合せ」が総督府学務局で開かれた。このように師範学校開設に向けての準備は着々と進められたが、実は、校舎の建築は人的準備に先んじて進められていた。3月4日付『京城日報』は、松村学務課長の談話を次のように報じている。

大正十年度に新設開校される中学校二、高等普通学校二、師範学校一は九年度臨時費を以て著々新築を急ぎつゝある……（中略）……現に京城の第二高普校は三清洞に師範学校は訓練院に著々新築工事を進めてゐるから四月の新学期から開校が出来ます、師範の方は現在の京城中学京城高普校にある臨時教員養成所を新築した校舎に移す事になります

4月18日、「朝鮮総督府師範学校官制」が公布され、ここに京城師範学校が正式に発足した。続いて翌19日、「朝鮮総督府師範学校規則」が公布・施行されるとともに赤木萬二郎が京城師範学校長に

任命された。

「朝鮮総督府師範学校規則」は、第1条において「朝鮮総督府師範学校ハ男子ニシテ小学校教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス」ることを謳い、附則において「京城中学校附属臨時小学校教員養成所規程ハ之ヲ廃止ス」ることを定めた。すなわち京城師範学校は、京城中学校附属臨時小学校教員養成所の生徒（当時31名）を演習科に編入することによってスタートしたのである。換言すれば、創立時の京城師範学校は、規定上、普通学校教員の養成は想定していなかったのである。

4月28日、京城師範学校長赤木萬二郎が京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所事務を嘱託され、同養成所の生徒（当時74名）養成に関する事務および関係職員の監督を委嘱された。上述したように3月4日以前に、「京城中学京城高専校にある臨時教員養成所を新築した校舎に移す事」は決まっていたが、赤木への4月28日付辞令によって、京城師範学校が普通学校日本人教員の養成機能も併せ持つことが正式決定されたのである。

5月5日、京城師範学校開校式が挙行された。その模様を伝えた新聞記事は次のとおりである。

朝鮮教育のエポックメーカーとして兼て計画されてゐた京城師範学校は、⁽⁵⁷⁾ 愈々五月五日午前九時京城中学校講堂に於て演習科生に対して第一開校式を挙行した。定刻に至り赤木新校長は師範学校設立の事情と目下の朝鮮教育界の状況を説き青年教育家たるべき確固たる志操の修養を訓話しついで新任教諭を紹介した。師範学校は普通科と演習科とに分かれてゐる。普通科は目下募集中である。

演習科は内地中等学校卒業生応募者五百五十余名中より選抜したもので他日朝鮮初等普通教育の第一線に奮闘すべき青年である。⁽⁶⁾

ここで注目すべきは、「演習科は内地中等学校卒業生応募者五百五十余名中より選抜したもの」というくだりである。すなわち、後述するような志願者数（京城中学校附属臨時教員養成所は178名、京城高等普通学校附設臨時教員養成所は352名）からして、上の記事にある「演習科」には京城中学校附属養成所のみならず、京城高等普通学校附設養成所の生徒も含まれているのである。このような認識が、当時社会的に共有されていたということであろう。

同様に、1921年、京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所に入学した桜井朝治も次のように言っている。

当時京城師範は、発足準備中で、私が入学したのは、京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所であった。こゝは、普通学校教員を養成するところで、小学校教員は京城中学校附属教員養成所に入学した。この二つの養成所を合併して演習科といていた。⁽⁷⁾

「二つの養成所を合併して演習科」という意識は、とくに高等普通学校附設側の教員・生徒に強かったようで、「京師は始め京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所と言った。京城師範学校と

なったのは大正十年五月五日で、この日が開校記念日となった⁽⁶⁾ という見方さえある。

しかし、発足直後の京城師範学校演習科は、精確には京城中学校附属臨時小学校教員養成所を改編したものであり、京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所は、1921年度末まで存続したのである。教員の身分も、前述した向井虎吉ら3名は京城第一高等普通学校教諭であり、京城師範学校教諭を兼ねていたのである。

1922年3月24日、京城師範学校の第1回卒業式が挙行される予定であったが、季節外れの大雪のため延期となった。新聞には、「京城師範学校の卒業式は廿四日挙行の予定であつたが積雪の為に来賓生徒の迷惑を察し特に廿五日に延期された」という記事と、「府内の公立小学校日出、桜井、元町、西大門の各校では廿四日午前十時から各校講堂に於て型の如く卒業及び修業證書授与式が挙げられた」という記事が並んで載っている。⁽⁹⁾ 京城府内4小学校の卒業式が予定どおり行なわれたのに、平均年齢が20歳にもなる京城師範学校演習科生の卒業式は延期されたというのである。鍵は、偏に「来賓」すなわち齋藤総督・柴田学務局長らの臨場が予定されていたことにあった。

3月25日、1日遅れの卒業式が行なわれた。その状況は次のとおりである。

京城師範学校第一回卒業式は廿五日午前⁽⁷⁷⁾二時から挙行された、さしもの大雪も歇むには歇んだが雪解けで道の悪いこと甚だしい、それにも拘らず定刻前齋藤総督を始め柴田学務局長、秋月本社長等多数来賓の顔が見えた、本年の卒業生は演習科が二十九名臨時教員養成所卒業六十名附属小学校が十二名であつた赤木校長は是等の卒業生に證書を授与した後で懇篤なる告辞を述べ、齋藤総督亦一場の告辞を与へられた之に対し卒業生総代飯野満雄君出で、赤誠肺肝を突いて出るやうな答辞を述べた⁽¹⁰⁾

この記事に関して、われわれは次のような点に留意すべきであろう。第1は、齋藤総督が親しく臨席し、告辞を直接述べていることである。総督臨席の写真は、記事よりも大きく掲げられている。ちなみに、当時の『京城日報』には卒業式関連の記事が多数掲載されているが、写真があるのは京城師範学校卒業式だけである。第2は、演習科と臨時教員養成所の卒業生が明確に区別されていることである。この区別が名実ともなくなるのは、卒業式7日後の4月1日、改正(第2次)「朝鮮教育令」が施行されてからであった。第3の留意点は、卒業生総代が、いわば本流である演習科(旧京城中学校附属臨時小学校教員養成所)ではなく臨時教員養成所出身の飯野満雄(後に丸山に改姓)だったことである。ルーツを異にする両集団の実質的な融合が進んでいた証左とみることができるであろう。

二. 「演習科」の構成

1921年3月3～4日、「新設官立学校創立事務打合せ」が開かれ、そこで生徒募集に関する件など懸案事項が話し合われているので、京城師範学校演習科への移行を前提とする京城中学校附属臨時

小学校教員養成所の生徒募集はこれ以後のことだったと思われるが、詳細は明らかでない。結果的に、演習科（定員40名）の志願者は178名、入学者は31名であった。入学者の年齢は26歳2ヵ月～17歳2ヵ月（平均18歳8ヵ月）であった。出身校別にみると、中学校が27名、師範学校が4名で、師範学校出身者に関しては、「普通科からの卒業は六年もかかる上に、傍系的に演習科が出来たので、内地の師範学校卒業生は故障のない限り其儘採用した」⁽¹¹⁾ という向井虎吉の回想談がある。

京城高等普通学校附設臨時教員養成所の1921（大正10）年度入学試験は、同年1月末～2月初め頃日本各地で行なわれたようである。次の引用は桜井朝治の手記であるが、当時の京城高等普通学校長加藤常次郎が群馬県前橋まで出向いて直接面接をしたことが注目される場所である。

私が朝鮮の教育者になろうと志を立てたのは、大正九年、群馬師範四年生の十二月であった。…（中略）…丁度そのころ朝鮮に師範学校ができ、生徒募集の要項が校内に流れていた。それによると、朝鮮での給料は日本内地の二倍だという。貧乏生活からの脱出は朝鮮に渡るに限ると考えた。あれこれ迷うことなく直ちに願書を出した。

入学試験は翌、大正十年の一月末か二月の初旬であった。試験場は、出願生徒の在在を当てたらしく、群馬師範では寄宿舎の畳の部屋、娯楽室が試験場であった。試験官として来られたのは、京城第一高等普通学校長加藤常次郎先生で、試験は口頭試問であった。⁽¹²⁾

この生徒募集の結果、定員80名のところ志願者は352名にのぼり、うち74名が採用された。「朝鮮総督府官報」によれば入学者の内訳は、「中学校ヲ経タルモノ」が63名、「中学校ヲ経ザルモノ」が11名であるが、⁽¹³⁾「中学校ヲ経ザルモノ」のうち1名は師範学校卒（桜井朝治）、8名は農学校卒、あと2名は不明である。入学者の年齢は、最高23歳10ヵ月、最下17歳1ヵ月、平均19歳2ヵ月であった。最高年齢は演習科のほうが上であるが、平均では京城高普附設養成所がやや年長であった。いずれにせよ、両者とも、中等学校卒業後数年の社会経験を積んでから入学した生徒がかなりいた点は共通である。

入学者全員（105名）の出身地を知りうる資料は今のところ見出されないが、1922年3月に演習科を卒業した29名、臨時教員養成所を卒業した60名、同養成所を同年6月に卒業した2名の計91名については、『京城師範学校総覧』1929年版によって出身校およびその所在地を知ることができる。そこで、出身校の所在地を出身府県と見做してその分布をみると次のとおりである。

群馬・福岡各9名、岡山・香川・大分各6名、熊本5名、千葉・岐阜各4名、福島・広島・徳島・佐賀各3名、京城・愛知・兵庫・和歌山・山口・愛媛・長崎・宮崎・鹿児島各2名、岩手・山形・新潟・栃木・茨城・東京・山梨・福井・奈良・大阪・鳥取・島根各1名

岩手から鹿児島まで32府県と京城の33地域にまたがっているが、九州（29名）・中国（13名）・四国（11名）など西日本が優勢であった。この広範な分布、しかし西日本への集中という傾向はその後にも維持され、演習科第2期生は、「北は北海道南は沖縄県の出身であったが、近畿以西、中国、四国、九州地方の出身者がとくに多かった」⁽¹⁴⁾ といわれている。

入学者数の関係で、演習科生は1クラス、教員養成所生は2クラスに編成された。この時二組に所属した塩飽訓治は、「演習科は三組編成で各組とも四十人、一組が主として内地人向き一小学校。二・三組は朝鮮人向き一普通学校」⁽¹⁵⁾と記憶している。ちなみに1922年度以降、一組が演習科第一部、二・三組が演習科第二部となった。

三. 「演習科」第1期生のその後

1922年3月25日、京城師範学校第1回卒業式において演習科生29名が卒業した。入学者31名のうち「中学校ヲ経タルモノ」2名が中退したことになる。

一方、卒業式時の臨時教員養成所卒業生は60名で、6月に2名が追加卒業した。この62名を出身校別にみると、中学校卒53名、師範学校卒1名、農学校卒8名である。入学時に比べると、「中学校ヲ経タルモノ」が大挙10名減じており、「中学校ヲ経ザルモノ」2名が中退したことがわかる。臨時教員養成所生の中退率の高さは注目される場所であるが、その理由は不明である。

卒業生の配属先決定の際に卒業生本人の意思がどれほど斟酌されたかについて、塩飽訓治は次のように回顧している。

赴任先について希望があれば申出よとの事だったので、みんなあれこれ話し会ったが、私はどこでも宜しい。命ぜられた処へ行くと書いて出したが、赴任道は忠北と指定された。⁽¹⁶⁾

この記述からすると、塩飽は乙種学資の受給者だったものと思われる。というのは、1921年4月19日、「朝鮮総督府師範学校規則」と時を同じくして制定・施行された「官立学校生徒学資給与並卒業生服務規程」に次のような条文があるからである。

第一条 左ノ各号ノ一ニ該当スル者ニハ学資ヲ給与ス

一 朝鮮総督府師範学校生徒

：

：

四 京城高等普通学校附設臨時教員養成所生徒

：

第二条 学資ハ甲種及乙種トシ甲種学資ハ食費、手当、被服、治療費、修学旅行費及入学旅費、乙種学資ハ治療費、修学旅行費及入学旅費トス

：

：

：

第七条 前条ノ卒業生ニシテ甲種学資ノ給与ヲ受ケタルモノハ卒業証書受得ノ日ヨリ左ノ期間引続

キ朝鮮総督ノ指定ニ従ヒ職務ニ従事スル義務ヲ有ス

一 朝鮮総督府師範学校普通科ヲ修了シ且同校演習科ヲ卒業シタル者ハ三年

二 前号以外ノ者ハ規定ノ修業期間ト同一ノ期間

前項ノ卒業生ニシテ乙種学資ノ給与ヲ受ケタルモノニ対シ一年間就職指定ニ関スル義務ヲ付スルコトアルヘシ

ここにあるように、甲種学資の受給者は「朝鮮総督ノ指定ニ従ヒ職務ニ従事スル義務」があったのに対して乙種学資の受給者には、「一年間就職指定ニ関スル義務ヲ付スルコトアルヘシ」と、卒業生の希望を入れる余地も残されていたのである。しかし、赴任先が最終的に総督府学務局によって決められたことはいうまでもない。

第1回卒業生の初任地は、演習科・臨時教員養成所とも、北は咸鏡北道から南は全羅南道まで13道すべてにわたった。京城師範学校の卒業生を各道に最低ひとりとは配置するという総督府学務局の意図が、当初から働いたものと思われる。

次に各人の初任校をみると、京城師範学校演習科が小学校教員の、京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所が普通学校教員の養成機関であったから、当然のことながらその卒業生は、それぞれ小学校・普通学校に就任した（臨時教員養成所を卒業した藤原重雄が京城の東大門尋常小学校訓導となったのが唯一の例外である）。

養成課程に応じて朝鮮全道の小学校・普通学校へ、という原則の中でも、彼らは、各校にひとりずつばら播かれたわけではない。各道には重点校ともいべき学校があつて、そこには複数名が配置されたのである。たとえば忠清南道の公州尋常高等小学校には徳山忠夫・本間秀雄・山口好見が、慶尚北道の大邱尋常高等小学校には河野留吉・松尾磐雄・横山武雄が、全羅北道の全州尋常高等小学校には清水仁太郎・本田武男・横田惣五郎が、慶尚南道の晋州第一普通学校には井門政見・小川隆義・鴛海進・紀寛良・小林久保・原田重幸・山室氏利・吉川浩一が、全羅北道の全州第一普通学校には慶徳保一・工藤喜代馬・武田秀夫・中林賀一郎・平春道範・脇美里が、忠清南道の公州普通学校には赤尾国之助・坂井直・中村八之助・山本喜多男が、忠清北道の清州普通学校には塩飽訓治・片田稻城・平田卯之助・向井宇之助が、江原道の春川普通学校には上田数馬・鬼塚圓成・菅原晋澄・藤田竹市が、黄海道の海州普通学校には飯村（遠藤）七治郎・菊池寛治郎・藤島広好が、全羅南道の光州普通学校には草場貢・原田重行・平松兼吉が同時配属された。

ここで想起すべきは、1921年4月の京城師範学校創立に先立って教員人事に関する2つの措置、すなわち1年現役兵制度と1年現役兵を教員定員外とする措置がとられていたことである。これを報じた同年3月4日と3月10日付の『京城日報』記事は次のとおりである。

来る四月一日午前九時龍山歩兵第七十八聯隊に入営すべき一年現役兵は来る三十一日京城教員養成所を卒業すべき三十七名にして卒業と同時に翌四月一日入営すべきが従来小学校教員は六週間服役なりしを改正の結果一年現役兵となれるものにて第二十師団に於ける最初の入営なり

朝鮮公立小学校職員定員規程中改正の件は朝鮮総督府令として三月十日付官報を以て公布せらるべく本令は教授力の減殺を防ぐ為め一年現役に服する者は定員外とするものにして四月一日より施行の筈なり

このような措置に基づいて、上に挙げた者の中には、初任校にとりあえず籍だけ置いて入営した者が少なくない。「私は一年現役兵として歩兵第七十九連隊で過した上に、見習士官勤務四ヶ月を余計にやったので、実際の赴任は大正十二年九月であった」⁽¹⁷⁾ という塩飽訓治がその一例である。

各人の教職歴を追跡すると、それぞれ小学校・普通学校の訓導として初任校に着任した彼らが、その後も小学校・普通学校勤務で一貫したわけではない。小学校から普通学校へ、すなわち日本人教育から朝鮮人教育に転じたことが確認される者は、井田学・斎藤路加・清水仁太郎・傍島浩雄・田所禎・田中（塚本）箴・原繁多・平山森八・藤原重雄・森山友来・横田惣五郎・吉武亀一・四ツ谷廣の13名（29名中44.8%）である。また、普通学校→小学校の経験者は、赤尾国之助・飯塚量平・上田数馬・浦谷一覚・大岩根村徳・小川寿一郎・駕海進・鬼塚圓成・菊池寛治郎・城戸亀蔵・工藤喜代馬・久米増行・慶徳保一・佐藤治・鈴木（阪東）栄・時松文一・中林賀一郎・平春道範・福田茂喜・向井宇之助・脇美里の21名（62名中33.9%）である。演習科と臨時教員養成所の設立趣旨のいかんを問わず、卒業生の小学校・普通学校間の人事異動はかなり盛んだったといえることができる。

小学校・普通学校間の異同のみならず、道境を越えて異動した者もいた。数はそれほど多くないが（91名中16名 17.6%）、井田学（黄海道→慶尚南道）、田所禎（京畿道→咸鏡南道）、平山森八（平安北道→京畿道）＜以上演習科卒＞、朝田久弥（平安北道→平安南道）、岩田磐雄（慶尚北道→平安南道）、城戸亀蔵（京畿道→咸鏡南道）、草場貢（全羅南道→京畿道）、坂野実英（慶尚北道→平安南道）、桜井朝治（慶尚北道→京畿道）、塩飽訓治（忠清北道→京畿道）、菅原晋澄（江原道→全羅北道）、野川武夫（平安南道→京畿道）、登秀次（京畿道→慶尚北道）、藤島広好（黄海道→全羅北道）、藤原重雄（京畿道→慶尚南道）、山口満徳（慶尚北道→慶尚南道）＜以上臨時教員養成所卒＞がその例である。これは、いわゆる広域人事といってよかろうが、演習科卒（29名中3名 10.3%）よりも臨時教員養成所卒（62名中13名 21.0%）に多いのが特徴である。このうち桜井朝治・塩飽訓治・野川武夫は京城師範学校への転入（母校回帰）、城戸亀蔵は京城師範学校からの転出である。卒業と同時に母校の訓導となった丸山（飯野）満雄を含めて、京城師範学校は、開設当初から附属学校訓導の一部を自家養成する体制をとっていたことがわかる。

次に校長歴をみると、全91名中、朝鮮で初等学校長になったことが確認される者は60名（65.9%）である。その比率がそれほど高くないのは、7名が1929年までに死亡し、卒業数年後に内地帰還する者も多かったからである。卒業して校長になるまでに要した期間は、演習科卒（16名）が平均7.25年、臨時教員養成所卒（44名）が平均7.64年で、両者間の差はあまりない。最も早く校長になったのは、いずれも教員養成所を出て3年後に普通学校長となった3名（鬼塚圓成・菅原晋澄・藤田竹市）である。鬼塚については、1930年8月発行の『朝鮮教育大観』に次のような略歴紹介がある。

鬼塚圓成氏は本年三十歳にして福岡県三潞郡木室村に生れ、大正十年三月福岡県立中学伝習館卒業、同十年四月渡鮮、同十年四月京城師範学校^(マ)依嘱生となる、同十一年三月京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所卒業、同十一年三月春川公立普通学校訓導を命ぜらる、同十一年四月歩兵第七十九聯隊に入隊、同十二年五月襄陽公立普通学校訓導に補せらる、同十四年三月仁邱公立普通学校訓導兼校長に補せらる、昭和二年十月三陟公立尋常高等小学校訓導兼校長に補せらる。⁽¹⁸⁾

『朝鮮教育大観』が執筆された頃（1929年5月～1930年5月）30歳だったということは、1925（大正14）年に江原道・仁邱普通学校の訓導兼校長となった当時の鬼塚は25～6歳だったことになる。しかも、1922（大正11）年4月から1年間兵役に服しているから、校長昇任前の訓導経験は、正味2年しかない。

菅原晋澄は、生年月日が不明で、したがって1925年3月に江原道・近徳普通学校の訓導兼校長となった時の年齢も不明であるが、1年現役兵の後2年の訓導経験を経て校長となった点は鬼塚と同様である。

『朝鮮教育大観』における江原道・興湖普通学校校長藤田竹市の略歴紹介は次のとおりである。

^(マ)藤田竹市氏は明治三十三年十月五日出生、大正十年四月一日渡鮮、江原道春川公立普通学校、高城公立普通学校、三陟公立普通学校、寧越公立普通学校等を歴任し、大正十四年四月現職に任せらる。⁽¹⁹⁾

1900（明治33）年10月生まれの藤田は、1925（大正14）年4月興湖普通学校校長となった当時、満24歳だったことになる。

鬼塚圓成・菅原晋澄・藤田竹市の3名には共通点が多い。第1は、臨時教員養成所入学の時点ですでに20歳前後に達しており、鬼塚と菅原は（恐らく藤田も）卒業後直ちに1年現役兵として入営したことである。第2に、3名の初任校はいずれも江原道の春川普通学校であり、そして1925年、揃って24～6歳の若さで、江原道内の普通学校の訓導兼校長となったのである。

ところで、当時の初等学校長の年齢に関しては、同じく『朝鮮教育大観』の平安北道・寧辺尋常小学校の校長略歴に、「学校長小暮晋作氏は本年二十六歳にして、群馬県出身、大正十一年渡鮮、最も若き二十四歳の時現校長に任命せられ今日に及ぶ」⁽²⁰⁾とある。すなわち、24歳で寧辺小学校長となった小暮は、『朝鮮教育大観』発刊2年前の1928年当時の最年少校長だったというのである。ちなみに、小暮晋作も京城師範学校演習科卒で、上記3名の1年後輩（1923年卒）である。

このようにみえてくると、広義の京城師範学校「演習科」が初等学校長人事の上でいかにも優遇されたかのようなのであるが、速断は禁物である。というのは、1925年当時、仁邱普通学校は鬼塚圓成と朝鮮人訓導1名、近徳普通学校は菅原晋澄と朝鮮人訓導2名、興湖普通学校は藤田竹市と朝鮮人訓導2名、そして1928年の寧辺小学校も小暮晋作と朝鮮人訓導1名（普通学校との兼任）の小規模校だったからである。都市部の大規模校では、日本人教員も多く、京城師範学校演習科卒といえども20代半ばで校長とはいかなかったのである。

次に、91名の中からユニークな経歴の持ち主を紹介し、以て当時の朝鮮における初等学校教員人事の一端を窺うよすがとしたい。

井田学は、黄海道・沙里院小学校から1924年、慶尚南道・釜山第六小学校に転勤した。爾来1945年8月まで、釜山第六小学校に京城師範学校出身の教員が絶えることはなかった。井田は、釜山第六小学校における京城師範閥の魁をなしたといえることができる。詳しくは拙稿⁽²¹⁾を参照されたい。

『京城師範学校総覧』1929年版によれば、河野留吉は「国学院大・高師」、藤田長信は「東京高等師範学校在学」となっている。⁽²²⁾河野の就学形態がはっきりしないが、彼らが初等学校教員に飽き足りなかったことは確かである。

田所禎は、1927年、咸鏡南道・安辺小学校の校長となった。しかし、安辺小学校が教員ひとりの単級学校だったからか、1929年、教員十余名を擁する北青普通学校に移った田所は、訓導に戻っている。そして1932年以降、改めて普通学校長としての経歴を重ねた。

鶴本亨は、京城南山尋常小学校を振り出しに京城鍾路尋常高等小学校～京城男子高等小学校～京城桜井尋常小学校～京城桜井国民学校と、京城の日本人学校に勤務し続けた。1938年に京城桜井小の教頭となったが、「朝鮮総督府職員録」が存在する1943年7月まで、校長になった形跡がない。京城の大規模校、それも教員が日本人ばかりの日本人学校では校長への門が狭かったことが窺われる。

徳山忠夫は、1928年に忠清南道・連山尋常小学校の校長となったものの、翌年には岡山へ帰郷した。連山小の後継校長は、京城師範学校同期の本間秀雄であった。

山口好見は、1922～24年度、忠清南道・公州尋常高等小学校の訓導を務めた後暫くの消息をつかむことができないが、1927年には台南師範学校の教諭となっている。3年の間に中等学校教員の資格を得て台湾に渡ったことになる。

朝田久弥は、前述した田所禎と同じく、小規模校（平安北道・永山普通学校）の校長からいったん大規模校（平安南道・平壤上需普通学校）の訓導となり、その後再び校長（平安南道・元灘普通学校長）に戻った。同様の経歴の持ち主としてこのほか岩田磐雄（平安南道・朝陽普通学校長～鎮南浦加徳尋常小学校訓導～寺洞国民学校長）、上田数馬（江原道・金剛尋常小学校長～鉄原普通学校訓導～泗東普通学校長）、城戸亀蔵（咸鏡南道・西湖津尋常小学校長～咸興第二普通学校訓導～恵山鎮尋常高等小学校長）がいる。

片田稻城は、忠清北道・沃川農業補習学校の教諭（1927～32年度）を務めた後、黄澗普通学校長となり、登秀次は、大邱中学校教諭（1927～32年度）から慶尚北道・琴湖普通学校の校長となった。このふたりは、中等→初等学校教員という珍しいコースを歩いたのである。

これに対して、『京城師範学校総覧』1929年版に「東京商科大学専門部在学」「京城帝国大学医学部在学」とある野川武夫と秦俊章⁽²³⁾が、その後初等学校教員に戻ったとは考え難い。野川と秦の上昇志向は、先にみた河野留吉・藤田長信に通じるものがある。

平安南道・北院普通学校の校長は、1930年、中松太郎から田中（塚本）箴に、慶尚南道・上南普通学校の校長は、1931年、吉川浩一から小川隆義に受け継がれた。上述の徳山忠夫→本間秀雄の

ケースと合わせ、京城師範学校同期生間の校長職バトンリレーの例である。

おわりに

本稿で強調したいことを改めて整理し、残された課題を提示することを以て結語に代えたい。

京城師範学校は、1921年4月19日、京城中学校附属臨時小学校教員養成所を演習科に改編することによって実質的なスタートを切った。(普通科生徒は、5月7～8日の学科試験、5月20日の口述試験および体格検査により選抜)一方、京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所は、4月28日、生徒の養成と関係職員の監督が赤木萬二郎に委嘱されることによって京城師範学校の傘下に入った。双方の生徒は京城師範学校のひとつ屋根の下で学んだが、演習科と臨時教員養成所の区別は、1921年度いっぱい維持された。この意味で、例えていうならば京城中学校附属臨時小学校教員養成所が京城師範学校の実子、京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所は養子であった。

ところがこの事実は、一般にはあまり認識されておらず、当事者の間にさえ、「二つの養成所を合併して演習科といていた」あるいは「京師は始め京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所と言った」という誤認がある。「二つの養成所を合併し」た広義の「演習科1期生」はあくまでも便宜的な呼称であって、京城第一高等普通学校附設臨時教員養成所が正式に京城師範学校演習科第二部となったのは1922年度からであることを改めて指摘しておきたい。

両教員養成所の趣旨に則して1年間の教育を受けた「演習科1期生」は、それぞれ小学校・普通学校の訓導となった。初任校の所在地は、小学校・普通学校とも13道にわたっていた。しかし、各校にひとりずつばら播かれたのではなく、各道の重点校には複数名が集中配属された。彼らの多くは兵役適齢期にあたっており、初任校に籍だけ置いて入営したのである。また、その後の各人の経歴を追跡すると、小学校(日本人教育)・普通学校(朝鮮人教育)間の異動がかなり盛んであり、地域的には道境を越えての異動もあった。これらの事実は、「朝鮮総督府職員録」などの丹念な分析によって検証されたものである。

京城師範学校が植民地朝鮮の教育界において重要な地位を占めたことは、第1回卒業式に時の総督斎藤実と学務局長柴田善三郎が列席したことだけをとっても明らかであるが、教育人事の上で、「演習科1期生」をはじめとする演習科だけの卒業生と1927年以降に輩出した普通科～演習科の卒業生の間に違いがあったのか、また京城師範学校の卒業生と、1922年から23年にかけて各道に設立された公立師範学校や1929年以後主要都市に開設された官立師範学校の卒業生とはどのような関係にあったのか、など解明すべき課題は多い。その意味で本稿は、京城師範学校研究の第一歩に過ぎない。

註

- (1) 弓削幸太郎『朝鮮の教育』自由討究社 1923年 p.146
- (2) 『京城師範学校史 大愛至醇』醇和会 1987年 p.180
- (3) 『朝鮮及満洲』第22巻第163号 1921年1月 p.44
- (4) 弓削幸太郎 前掲書 p.250
- (5) 『京城日報』1921年1月12日
- (6) 同上 1921年5月6日
- (7) 『京城師範学校史』 p.547
- (8) 同上 p.156
- (9) 『京城日報』1922年3月25日
- (10) 同上 1922年3月27日
- (11) 『京城師範学校史』 p.181
- (12) 同上 p.547
- (13) 「朝鮮総督府官報」1921年7月4日
- (14) 『京城師範学校史』 p.275
- (15)(16)(17) 同上 p.272
- (18) 西村緑也編『朝鮮教育大観』朝鮮教育大観社 1930年 江原道 p.31
- (19) 同上 江原道 p.49
- (20) 同上 平安北道 p.31
- (21) 拙著『旧韓国～朝鮮の「内地人」教育』九州大学出版会 2005年 pp.152-153
- (22)(23) 『京城師範学校総覧』1929年版 京城師範学校 p.369

**Inaugural class of Keijô Shihan Gakkô “Enshûka”
(Keijô Normal School “Training Course”)**

Tsugio INABA

This article consists of three sections. The first section provides an overview of the blueprint of the establishment of the Keijô Shihan Gakkô through its first graduation ceremony (March 1922). Emphasis is given to the fact that clear distinction was given between the two groups of students who studied there from its establishment in May 1921 through March 1922. One group belonged to the Keijô Shihan Gakkô “Enshûka” (Keijô Normal School “Training Course”), which was formerly an ad hoc training center of elementary school teachers adjunct to Keijô Chûgakkô (Keijô Middle School). The second group was those who were affiliated with the ad hoc teachers training center of Keijô Daiichi Kôtô Futsû Gakkô (Keijô First Higher General School). Yet the two groups are generally called the inaugural class of Keijô Shihan Gakkô “Enshûka” for convenience’s sake. The section that follows presents the students’ ages, the name of the schools they formerly attended, and their birth places. The last section investigates the students’ careers after graduation.

Close analysis of the *Chôsen Sôtokufu Shokuinroku* (Government-General of Korea Personnel Directory) clarified that; 1) they were appointed throughout the thirteen *dô* (provinces) of Korea; 2) although those who were trained to be the teachers at Japanese schools were first assigned to Japanese schools and those trained to teach at Korean schools were assigned to Korean schools, frequent personnel exchange took place between the two types of schools later; 3) networks among the graduates were firmly maintained through such ways as appointment at their alma mater and passing the position of principal among themselves. The third section attempts to discuss Keijô Shihan Gakkô in the context of the education history of colonial Korea.